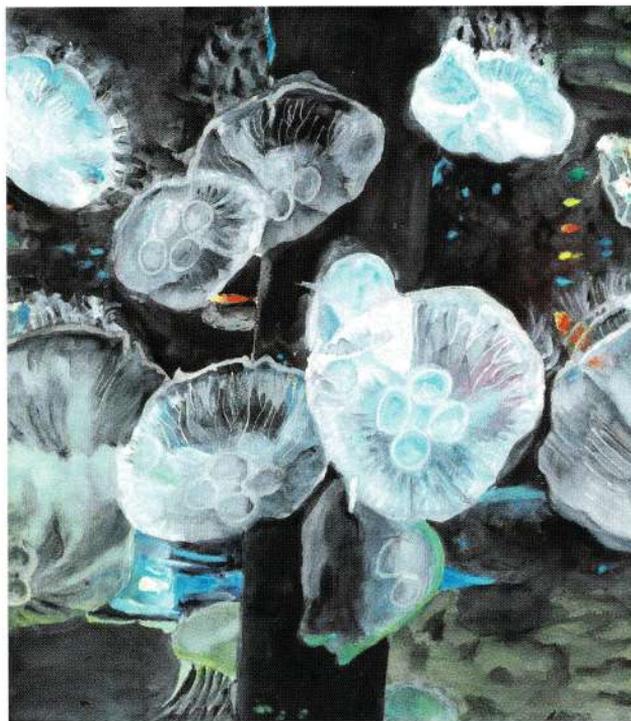


村野次郎創刊

香蘭



2022年(令和4年)10月号

小特集 誌上全国大会

第99卷

第10号

通卷1102号

二〇二二年(令和四年)十月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第九十九卷第十号



香 蘭

2022年(令和4年)10月号
 小特集 令和四年 誌上全国大会
 第99巻 第10号 通巻1102号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(86)	渡辺 君子	表二
近詠十五首 横浜金沢称名寺	渡辺 礼比子	2
作 品		4
一		22
二		50
三		56
推薦香蘭集		57
香 蘭 集		15
一頁公論(17)東北の旅に出会った啄木	牧野 道子	16
作品一特選(八月号)	鈴木(桂)・伊藤(美)・中村(か)・石井・高島・室橋・相川・長野	18
作品二、三特選(八月号)	江口・竹本・沙阿羅・関(哲)・田中(あ)・中村(陽)・柳沼・安田・川久保・篠永・手島・藤田	20
村野次郎への旅(150)	千々和 久幸	29
小特集 令和四年 誌上全国大会(結果発表等)		62
エッセイ・自由研究 生きること、或いは死ぬということ	宮口 弘美	64
焦 点(八月号) 予定調和の枠から出た歌	石井 雅子	66
七首抄(八月号)	朝香 西・福本・栗原	67
岡野甫江「山はみどりに」評(八月号近詠十五首)	市川 義和	68
作 品 評(八月号)	大井田 啓子	70
作品一	庄 司 健造	72
作品二	柳 沼 健造	74
作品三	平 川 良枝	76
香蘭集	杉山(伊)・水谷・朝倉(千)	77
緑 地 帯	田 中 あさひ	79
耳言あれこれ(11)	山下 紘正	80
明宝研究会第一三〇回七月例会 能と和歌	庄 司 健造	88
他誌拝見123		88
歌会及び会合・会員消息・他		90
編集後記・新宿日記		94
表紙絵		表三
中村 陽子「浮遊」		和雄
目次・緑地帯カット		

渡辺君子

こがらしの吹く音さむしをさなごを

こころに持ちて急ぎ帰るも

『夕あかり』

この歌は、村野次郎先生の初期の作品を収めた歌集『夕あかり』の中の一首。

この歌が詠まれた大正十三年は先生三十歳で、妻輝子さんが病気で亡くなった年でもあります。幼な子は「香蘭」発行人の中村富美子さん。富美子さんは当時二歳ぐらいです。

この歌は、妻が入院中で、母親のいない家で待つ幼な子を案じて、急いで家に帰ろうとしたのでしよう。昔の家は今とは違って暖房なども行き届かず、寒々としたものだったと思われる。私の実家なども木枯らしの頃は、家の中で風が起こるかのようでした。

若い父親として母親のいない幼な子を思い、いたたまれない気持で帰りを急いだ先生、その姿が思い浮かびます。

「をさなごをこころに持ちて」は簡潔にして明瞭、先生の歌の特質がここにも表れていると思います。

(『夕あかり』98頁、『村野次郎三百首』11頁に掲載)

四 選 者 の 作 品

風の随に 平塚 千々和 久 幸

人生の大事の一つ身を過ぎてヤマホトトギス今朝は啼かざる
お互いが心変わりやせぬようにハンカチの木を育てています
カタルシスもロマンもあらぬ気紛れな風の随に身を泳がする
死はしよせん一度きりなり乾涸びし蚯蚓が路上にあまた転がる
ああ今日も生きていたんだ そうなんだ朝一番に薔薇を摘みきて
墓を買うことはまだ先午後よりは極楽寺町に鍼打ちに行く
欠氷かき氷人に離れて突きおり夏の思い出などさらになし

死を待てる命もあるかメイファーズ 祈りようなく今日が暮れたる

註 報 鎌倉 香山 静子

土曜日の朝刊に大きく「安倍元首相撃たれて死亡」と載りぬ
日本経済動かしと言はれた「アベノミクス」安倍氏は惜しくも銃撃に倒る
遊説中の元首相銃口に屈したりそんな現実あつてはならぬ
主義主張違へど互みに聞くべきを民主主義の世に何たることか
政治家の襲撃さる世なれども民主主義は守りゆくべし
朝刊に「かくも卑劣な蛮行は断じて許さじ」とふ首相の言葉

「言葉には言葉で返す」世に在りて正に「卑劣な蛮行」と言はむ
再びをかくも卑劣な行動のあつてはならず日本の今に

女郎花・男郎花 我孫子 丸山 三枝子

追い越してゆきたる人に曳かれゆく子犬がふつと振り返りたり
投票の行きと帰りの暮れなずむ道に涼しもアガパンサスは
表参道、溝の口と乗り換えて二年ぶりなる香月歌会へ
体に悪い食べ方などと騒ぎおりほんとうの飢えは知らざるままに
初蟬の声たよりなく 列島のいたるところに大雨警報
店頭みせの桶に溢れて売られる黄の女郎花うつつならざる
男郎花は店頭になしふるさとと速きにありてオトコエシ咲く
背中から足から顔から心から老いてゆくなり 蟬しぐれ降る

ピンポフツル 東京 桜井 京子

行きに見し青鷺そこにもうをらず風のみがある水の畔ほとりは
長いあひだ勘違ひしてゐたわたし あなたもですか半夏生の葉よ
いつ来ても青筋揚羽のゐる小径ピンポフツルが咲いてゐるから
一身上の都合と言へり遠ざかる電信柱のやうなさよなら
病院の回転ドアがくわいてんしあなたがあつたあとの空洞
かたはらに戦争はまだ来てをらず真夜中に見るもち猫動画
もう長く引き籠もりたる卓袱台が暗がりとなり物置にある
寂しさはポイントとして貯めておくハワイ旅行に行けるかしらん

作品一特選



(八月号作品から)

千々和 久幸 選

五 月 西 宮 鈴 木 桂 子

また一つ終りを告げて思ひ出の「三省堂」の写メール届く
超ミニの女子学生を男らは待ちてあの頃三省堂前

美しく大胆なれどアマリリスどこかをさなく五月を咲いて

さりげなくあふちの花をそよがせて五月の風は過ぎてゆきたり

しばらくを佇ちて眺むる咲いてあるメルケルみたいなジャーマンアイリス

トランプかプーチンなるか正恩かわか家は時々妖怪が出る

きけば娘も演習で読みしと吉本隆明の『言語にとつて美とは何か』を

・滑らかに詠んで屈託がない。作歌力に進歩の跡を窺わせる。

あれは我 川 崎 伊 藤 美 恵 子

カモミールの花を摘みきて淹れるお茶さみどり色に五月はじまる

別々の墓を作りてとことわに並んでいたしつかず離れず

潤沢のカールに失くせし薔薇色のアーミーナイフ思う初夏
羊羹を切るとき失くしたスイス製アーミーナイフ 潤沢の夏
負けるが勝そんな言葉もあつたつけ 敗者復活戦にも負ける
忙しい忙しいと鳴いて飛んでゆく黒き鳥あり あれは我なり
バラ肉で上から下まできつちりと巻いてアスパラ虐待している
・瑣末な日常の奥に(我)を沈めて、心境の深みを抉って達者な歌。

傘 福 岡 中 村 かよ子

内側に空を描いた傘を買うこれでいつでも私は飛べる

傷つかぬように時々傘をさすほんの少しの静けさのため

この年になつても夢見る時はあるくるくる回る傘の下なら

土砂降りが一瞬私を閉じ込める何と自由なこの傘の下

この指が触れられなかったものがある的に届かぬあの矢のように

頑張つて坂を登つて背伸びして掴めぬものを今日も見ている

俺がまだ通用するのか、空の上で「孫子」が笑うこの駆引きを

・奔放自在に見える背後に、作者の鬱屈した心情が見え隠れする。

ひまはり 習 志 野 石 井 雅 子

ひまはりのウクライナの地とほけれどふたたびあれよひまはり畑

最後まであきらめるなの占ひにチューブのクリーム絞り出したり

大吉のおみくじなのに待ち人は来ず失せものは出ず 縁談はどうでもよいが

どんな母と思つてゐるか息子より「ロマンス詐欺に気をつけよ」とは

夜の道にコンピニのともす誘蛾灯ひとりほつちが吸ひ込まれゆく
ガガンボの長き手と脚ふり回し佐々木朗希の完全試合

窓の外に芽吹くつるバラ見てをりぬ古き茶房に雨やどりして

・時事や社会事象に敏感でありながら、古い情緒にも興味を示す。

地 熱 鎌倉 高 昌 憲 子

大いなるしだれ桜に風吹きて無量寺が谷ひねもすとよむ

この上に合槌稲荷の祠あり階の途中に見る春の海

たまさかに針と糸もて座りをり菜花に雨のけむる窓辺に

この春に九十歳の父の掘りあげし筍来たる地熱をもちて

日溜まりのベンチに一人どんぐり帽かぶる人あり私かと思

若くない二人であるよお互ひに綻びあれば繕ひあはむ

ふり返る五月の谷戸のゆふぐれに白き花見ゆ記憶のごとく

・郷里に思いを馳せながら、鎌倉の風光に生きる己を凝視する。

戯 れ に 群 馬 室 橋 玲 子

電話にて元同僚の愚痴を聞く長き話に相槌打ちて

葉桜をおおぎつつ車に夫と行く今年は花をついに見ざりき

木香薔薇や小手毬見つつ畑に行く夫の大きな手にすがりつつ

戯れに差す口紅の赤きゆえ心がホッコリあたたかくなる

籠り居の日日に紅さしあかねさす心の内は秘めて家事する

「クレマチスと」てっせん」は同じ花と知る朝日を受けててっせん咲けり

勢いをつけて跳ねたし 青青と育つ野菜をまぶしみて見つ

・夫の介護があつての毎日、七首目の一、二句には作者の切実な思いが。

ユリノキ若葉 川 越 相 川 公 子

ユリノキの若葉まぶしも博物館で阿修羅像みしあの日のやうに

寅年の開帳といふ薬王寺の薬師如来を拝観にゆく

二十九体の円空仏と葉師様に俄信者のわれが癒さる

ネモフィラの花の青さの清しさよ円空仏を拝みきし眼に

くちなはしのごとく祭りを映しをり戦争ニュースを告げたる後に

山里の農家カフェへと続く道ほたるぶくろが灯りてゆれる

無事なるかと思ひてそつと覗きみる卒寿に近き夫の長風呂

・四首目の三、四句、五首目の上句の発想が良い。三首目の結句は不要。

五 月 横 浜 長 野 道 子

日に幾度泣き声聞こえお隣のかおるちゃん一人で生きいるごとし

歌心取り戻さんと出かけゆく緑の木立の版画展まで

連休の昼の大通りしばらくをマスク外してこれが私よ

早朝に椿のごとき出血ありいずこの枝より滴りしものか

マスク外し冷しうどんを啜り合う三年ぶりの食卓に六人

おもしろきボールの粉を捏ねるも透明になるまでの力が足らず

花びらは剥がれるように散りいたるアルストロメリアは二日をかけて

・五、七首のように虚心坦懐に詠むべし。四首目は詩意識過剰。

作品二、三特選



(八月号作品から)

桜井京子 選

〈作品二〉

夫のスニーカー

柏江口絹代

父の日に息子にもらいしオレンジ色のスニーカー一足残して逝きぬ
朝顔につほみ付く日の待ち遠しカナダの娘がこの夏帰る

ターンしてまたターンして黒蝶が花に戻りぬおだまきの花

桃色のレモンのつほみふくらみぬ逝きし夫と植えたる苗木

早朝の窓を開ければ東武線の踏切の音が遠くに聞こゆ

・一首目、四首目、亡夫の影があちこちに残り夫はまだ生きているのだ。

グーゲルに聞く

千葉 竹本 幸子

サブスク、エスディージーズ、サステナブル分らぬことはグーゲルに聞く

処分する鞆の底に切符ありあの日乗り遅れし「幸福」駅行き

自分とは何者かなんて知らぬままクラゲは今日も漂い生きる

G W に心浮きたつ事もなく戦禍と詐欺のニュース見ている

コロナ禍の日々の死者数報じられひとりひとり大切にひとり

・一首目、意味不明の外來語にグーゲルのお手軽さが一役買っている。

隣の庭

相模原 沙阿羅

カザグルマ絶滅危惧種の花と知る 近所の庭に咲いています
わが毛布タオルケットと相性が悪くて毎朝泣き別れなり

新品の下着をおろせば何だか嬉しいとつても嬉しい

何気なく話すは息子の幼き日 巣立ちのフラグ立ちているかも

自転車で少しの坂が上れないワタシもそろそろお年頃なり

・肩の力の抜けた自己戯画化が生活の余裕を感じさせる。

ケータイ

大分 関哲行

十年間使い続けたケータイを引退させんと両手で閉じる

夕方の散歩の途次に吉野家の牛丼一つテイクアウトす

抑止力と言いつて膨らむ防衛費戦争放棄の日本にっぽんなるぞ

日本の安全神話が脅かさる空にミサイル飛ぶ日もありて

・三首目、四首目、きな臭いにおいが深いはじめた日本を危ぶむ。

笑顔千両

取手 田中 あさひ

五十年そだちて大仙人掌となりたるをけふ返したりわが裏山に

鋭く長き棘に総身を武装せるきみなれど根はかくも果敢はかなし

四回の引越しもわれらと共にせしきみと別る日の来ようとは

このままで生きてくれぬか昨夜よべからの雨にうたれてひとり立つきみ

あしたには笑顔千両ひらくべしねぢれて蓄むこの朝顔も

・一首目から四首目、擬人化された大仙人掌との別れをドラマチックに。

尾崎豊展

東京 中村 陽子

早春の街の空気が生ぬるい「尾崎豊展」の会場を出て

怪物が生まれるような音たてて夜中に水が氷に変わる
交番にピンクのつつじが花盛り青信号にまだ変わらない

玄関にすずらんひそと咲かせいるこの家の人はきつといい人
タンポポの綿毛を飛ばす子どもに誰も誰も爆弾落とすな

・五首目、ウクライナ戦争を念頭に平和な光景と爆弾との対比が効果的。

負の遺産

足利 柳 沼 きよ子

ロン、ヤスを真似て晋三ウラジーミル片思いでは蜜月ならず
元議員こじき根性極まりてグリーン車ただ乗り十二年間

大風に葉を撒き散らす負の遺産父の植えたる防風の杉
大風に刺刺の葉を撒き散らす杉が伐られて西空広し

・一首目、二首目、政治の世界を鋭く切つて捨てる小気味よさ。

贅肉もたず

行田 安田 恵子

護岸工事完了したれば川の貌なくして川は放心したり
フキの葉の青き葉陰に頭をあげてお久しぶりとトカゲの地吾郎

熊本産と書かれし朝餉の春あさり椀の中よりニイハオの声
HBの鉛筆一本尖らせてつまらぬ歌を編みては解く

島人は贅肉もたず一艘の小船に一家のなりわいのせて

・ウイットとアイロニカルな視点が一首に生彩を与えている。

〈作品三〉

春うらら

川口 川久保 百子

春うらら那須与一が鎗矢を放ちし海はうらうらと春
鳥一つ通り過ぎればまた鳥が陸地のごとく続く瀬戸内

乗用車二台が降りてクレール車一台乗って春の海ゆく

鳥々の鯉のぼりがうれしそう群青の海は群青のままに

ゆるゆるとフェリーは進む春の海草間彌生のかほちやの島へ
・瀬戸内海をクルーズする心地よさ、読者も共に船旅が楽しめる一連。

未 来

川崎 篠 永路子

口先を切られしカマス目はただの空洞となり日に干されおり
ゆで卵を小鍋に回すあたりまえに卵の未来をわれら食べ
紅色が薄いと市場ではじかれし「わけあり秋鮭」そうかおまえも
何もかもできなくなりて何もかもわからなくなる日にも来る春
・四首目、自分が終わっても世界は終わらない、という死生観。

鴨

福岡 手島 洋一

気まずさを残し飛び乗るバスの背に体あずけてふかく沈みぬ
順々に水に飛び込む田の蛙五月の風に早苗も揺れて
岸辺より離れて浮かぶ鴨ひとつ仲間の去りし広き湖面に
バラ園を見下ろす丘の風車陽光浴びて羽根を休める

・三首目、仲間と旅立つ選択をしなかった鴨、孤独な作者の心象風景とも。

椎の木

横浜 藤田 祐恵

日を継いで味わいつくしたカステラの最後の一切れ干からびており
保護猫を飼いはじめたる友人が喋りだしたら止まらなくなった
老化的メカニズムなる番組を録画して見る連れ合いとわれ
公園の古い椎の木に立ち止まる懐かしい君に会えた気がして
・三首目、作者と連れ合いの共通の関心事は「共白髪まで」の現代版。

横浜金沢称名寺

渡辺礼比子

片恋はとうに忘れて夏の野に咲けるひめゆりただ静かなり

この日頃気力の萎えているわれは大楠の幹にしまし手触りつ

三人のおみな来りて鯉を誉むわがカワセミを待つ橋の上

卜部家の出とは後世の捏造とまずは書かるる兼好法師

不勉強なままに来たれる「兼好展」絵葉書二枚買って帰り来

「住めばまた憂き世なりけり」この会を去り行く人に贈らん言葉

疑わず人を信じるほうが楽　ゴーヤの黄の花咲きては落ちて

地アナゴを座敷に君と食みし店老人施設となりて静もる

素麺を茹でつつ耳にせしニュース「安倍元首相が撃たれたようです」

土下座しているにはあらず　道に這い逸れ弾探す警察官ら

一昨年この社の茅の輪くぐりしがその後のことはとんと忘れつ

ひと言随想

遠い世の風に吹かれて

出来ぬことを出来ぬといわせてもらえずに日傘をさして出かけてきたり

不名誉なることのごとくに令和二年母のコロナをひた隠しせり

海^{かいひ}彼よりコロナはいかなるルート経て老い母の身に辿りつきしや

紅薔薇のアーチ潜りて生還すコロナに勝ちし九十四歳

キッチンの北窓をあけると潮風が吹き込んできた。今日は何だか歩きたい気分。称名寺の廻りまで足をのばしてみることにしようか。称名寺は金沢北条氏の菩提寺である。門前の仁王様に挨拶の後、釈迦堂、鐘楼等を一巡し、池を望む木下の椅子で一休みする。園内には実時が収集した貴重な書籍を収めた「金沢文庫」があり、折しも「兼好法師と徒然草」の展示を開催中だったので、覗いてみる。

散策の帰路に、たまたま出会った古老から「国道の辺は明治まで塩田だったんだよ」と、教えられる。馬頭観音の前に立つと、どこからか木遣りやお囃子の稽古の音が聞こえてくる。古いといっても全く観光と縁のないこれらの町には、曰く言い難い泥臭さが漂っており、それが私にとっては心惹かれる理由なのかもしれない。ぶらぶら歩いていたら、つい時を忘れ、万歩計が一万歩を越えていた。

村野次郎への旅（150）

大正期の「香蘭」（十一）

千々和久幸

引き続き大正十五年（1926）年発刊の「香蘭」第四巻第五號を読んでいる。エッセイの少ない村野先生が珍しく「大迷、大悟」というタイトルで筆を執られているので、読んでおこう。

この一文は四月號の北原白秋の一家言にある「棄つること」を受けて、「これは短歌道に精進する人々にとつて最も重要な心掛の一つ」として、おおよそ次のようにパラフレーズ（解説）されている。

今畫家が一つの風景を寫す場合に於ても、種々雑多なものが畫家の眼に映ずることであらふ。其時あれも畫きたく、これも取入れたく、其末出來た繪は、實に盛り澤山であつて、何處に自然の生命があるか判らないことになるのである。之に對して極めて簡素なる墨繪の如きものでも、其僅かなる筆の動きが誠に

生命を把握して居るのなれば、其は眞の藝術品と云ふを得るのである。

短歌は三十一字の短詩形であるが故に、更に冗漫を捨て、眞の生命のエキスとでも云ふ所のものを取入れることが益々肝要になつて来る。一首に種々の材料を取入れる中に、いつか單なる報告歌となり、事件の羅列となり、そして一首の生命は、もう何處かへ消へてしまつて居る。かかるものは單純化したる短歌と云ふことは出來ない。自然を見た場合何でも歌ひたいのは凡人當然のことであつて、其處に所謂修業の必要と云ふことが起つて來るのであると思ふ。

然し近來、この棄つること、保つことに大した苦勞をせずして、いつか歌道を會得する人が多いやうであつて、誠に結構なことであるが、實際に於て會得したものであるかどうか、大いに迷つた者であつて初めて、大悟し

得るものであると思ふ。

氏（筆者注・北原白秋）の『私』ときは極めて怪しい』といふ大凡人のこの語こそ、私には有り難いのである。

○ 專念に作歌することは私達にとつて、苦しみであると共に何とも云へずまた樂しみなものである。私の貧しい経験からしても、辛苦の末思はざる會心の作を得たと思ふ時のごときは、古今の名歌にも決して劣らないと思ふ氣がする。しかし其歌も日を経るに従つて次第に不満を見出し、終には、どんな歌より劣つて居るのではないかと思ふ様になつて來るものである。

これ程六ヶ敷いものであるのに、この短歌が遠き昔より、現在も尚私達の心から離れないのは如何なる爲めであらふ。これは畢竟するに、短歌のこの不可思議なる本性其物か私達を魅する原因となるのではあるまいかと思ふのである。（原文のまま）

しごく当然のことが述べられていと言つてしまえば身も蓋もないが、これを村野先生の肉声を通して味わうところに、短歌におけ

る生命の重さも実感出来、それ以上に結社への繋がりも親近感も湧こうというものだ。

もともと先生は「論」の人ではなく、「作」の人だから、先生の歌論に接する機会は滅多に無い。あえて言うなら、先生の肉声に触れることで結社の連帯感が醸成され、師弟関係の有り難さが実感出来るというものである。

わたしはあつさり「短歌はカッティングに始まりカッティングに窮まる」で済ましているが、これでは短歌の有難味も結社の温みもあるまい。話が逸れた。

前月歌壇合評から一首だけ引いておく。評者は杉浦翠子、矢代東村、穂積忠、村野次郎である。

(アララギ)

・金物の火箸のほひ手につきて吾子のみとりのひとひ暮れけり 今井 邦子

(翠子) 邦子さんのお歌は、この頃益々君の師の赤彦師に似て来て、然かも昨今非常な考練ぶりを見せて居る。このお歌にしても、常人なら見落しきうな、細片を拾ひあげて体をなしますが大家の手法である。然し私の語態から云へば『暮れけり』は『暮れたり』にした。邦子さんのお歌には非常な出来不出来が

發表される。(中略) 昨冬、『菊の御宴のめでたけれ我が晴衣裳に雨ふりかゝる』を氏の作として見る時なまげないと思つた。ところが、『立ち並ぶ佛の像いま見ればみな苦しみに堪へしみがた』と云ふ傑作がある。前後比較して見ると、とても同人の作とは思へない深淺さである。『苦しみに堪へしみがた』と云つたのは、佛の像を紹介したと云ふよりも、

邦子さんの心を見せて呉れたのだ。(東村) 前評者の赤彦に歌に似て来たといふ意味はよく分らない。この歌はよいと思ふ。(忠) 少し調子がたりない。つきてのてがいがいいのかもしれない。境地はいゝ。

(次郎) 特殊にして、些細な境地をも作者は見のがして居ない。或る哀愁を一首の上に漂はしてゐる。然し上句をあらぬ氣に歌つたら更によくはしなかつたかと思ふ。

例によつて翠子評は饒舌で端折らざるを得なかつたが、傑作と評した引用歌はさらに言葉を継いで「邦子さんが、寫生を超越して自己の理想化をとつたので、私はこれを短歌の象徴と云ひたい」とまで言っている。

本間樂寛「香蘭のあゆみ來し道(五)」は、北原白秋が巡禮詩社を引き拂い、葛飾の小岩村に移つた紫烟草舎時代が辿られている。

此の時代の社の組織、つまり紫烟草舎の舎風なるものは、それこそ驚くべく嚴肅な、謂はば藝術精神のトラピストともいふべき程であつた。單に詩歌の研究のみでなく、眞に人間としての靈性を磨き、禮節を修し、人格を鍛へ上げる事を念としてゐた。従つて子弟の關係の如き極めて嚴格で、聊くも氏に何等の相談もなく、作品を發表したり、或いは歌集、雑誌を刊行する等の輕率盲動は禁じられた。併しながらかく外に向つて峻嚴であると同時に、内に於いてはどこまでも親愛的な態度で、皆を抱擁撫育せられた。之は全く尊い事である。寂しい、けれども親しい、貧しい、けれども暖かい、精神的の集團であつた。この親愛的な精神的集團の氣風は今もなほ傳つてわが香蘭にありと云ひえよう。

舎中の者は皆兄弟の如く勉強した。村野、酒井、島田、荒木、石野の諸氏は依然として絶へざる努力を續けてをられ、その氏も異常の進境を示された。

(後略)